

認証国際ハラール査察官トレーニング（CGHA）参加報告

拓殖大学イスラーム研究所 山下 泰弘

2016年7月25日—29日マレーシアはサバ州、コタキナバルのサバ大学（UMS Universiti Malaysia Sabah）で開催された、認証国際ハラール査察官トレーニング（CERTIFIED GLOBAL HALAL AUDITOR (CGHA) TRAINING）に、筆者と海外事情研究所助手野村明史氏が参加した。主催は国際的にハラール査察を行っているHALAL TALKである。トレーニングが行われたサバ大学は、サバ州初の国立大学として

1994年、サバ州コタキナバル市郊外に設立された新しい大学である。このサバ大学は、日本の近畿大学と養殖マグロについて共同研究をしている大学である。

この大学で認証国際ハラール査察官トレーニングが行われた理由は、同大学が、マレーシア政府が発行するハラール調査において、製品のハラール性を科学的部分から検証する役割を担う機関のひとつとなっているからである。

日本からは当2名の参加であった。



研修を行った校舎



大学内の海岸

講師陣：

- ① Dean Faculty of Food science & Nutrition, University Malaysia Sabah
(サバ大学 食品科学栄養学部 学部長)
Professor Dr. Sharifudin MD Shaarani
- ② Dean Faculty of Food science & Nutrition, University Malaysia Sabah
(サバ大学 食品科学栄養学部 助教授)
Assoc. Prof. Hajah Mariam Abdul Latif
- ③ Dean Faculty of Food science & Nutrition, University Malaysia Sabah
(サバ大学 食品科学栄養学部)
Umi Hartina Mohamad Razali
- ④ Dean Faculty of Food science & Nutrition, University Malaysia Sabah
(サバ大学 食品科学栄養学部)
Mohd Hazim Bin Mohd Yusop



講師陣と



講義風景

- ⑤ Halal Talk : Global Lead Halal Auditor
(ハラール・トーク：グローバル・ハラール査察官)
Azlan Oppier (MBA, BA, ACTA)

国際ハラール査察官トレーニング（CGHA）

目的：国際的ハラール査察官の育成

プログラム：授業はテストを含め5日間、概ね8時30分から17時まで行われた。

7月25日

1. タイエブ (tyyib) な食品、食品の管理について

食物が変化するシナリオが持つ安全性の負担、食物が変化するパターンと食物由来の病気、食物の安全性の重要点、食物の安全性とは、食物の腐敗、腐敗が起こる共通原因、腐敗の特徴、腐敗の主要原因、腐敗の原因となる酵素、各種食物の腐敗（肉、魚、卵、ミルク、野菜、果物）、食物由来の病気、病気を引き起こす原因菌、食中毒の症状、汚染や毒から食物を避けるには、食物の安全性のハンドリング

2. 食品添加物について

ハラールな成分、食物の成分における重要な点とは何か、Mashboohとは、疑義のある成分、酵素、ラード、乳化剤とは、E-CODEの意味とは、加工助剤、放出剤、清澄剤とは

3. ハラール保証システムについて

品質、品質管理、品質保証について、Malaysia Halal Assurance Systemの原則、社内ハラール委員会、トレーニングプログラムについて、Halal Assurance Management Systemについて、製品回収手続きの開発、トレーサビリティ

4. イスラームとハラール／原則と証明

ハラール、ハラーム、シュブハとは、食品の構想、ハラール食品のガイドライン、ハラール・ハラームの原則、ハラームな食べ物、飲み物とは

5. セルトゥ (Sertu) : 儀式的洗浄について



SERTUに使用する土と石鹸

SERTU (儀式的洗浄)、MUTRAKの定義、Najis Mughallazah (重大な穢れ)、Ain Al-Najasat (不浄物)の定義。

洗浄における土、水の仕様、手順について。

6. Khamr (ハムル・酒) とアルコール

ハラール産業の重大な問題点とは、飲み物におけるイスラームのガイドライン、Khamrとアルコール、Khamrはハラーム、アルコールについて、アルコールの科学的定義、アルコール用途、食べ物の中のアルコール、工業用アルコールについて、ノンアルコールビールの問題。

7. Jalalah, Istihalah, Istihlakについて

7月26日

8. ハラール食品に関する法律：APD 2011

なぜハラール？その背景、ハラール食品管理、なぜハラール食品の管理に法律が重要か、TDA (APD) 2011について、誤解・混乱させることについての犯罪・刑罰、マレーシアのハラール証明書・ハラールロゴ、許可されていないハラールロゴ、認証と報酬の適用について、犯罪と刑罰について

9. MS (マレーシアスタンダード) 1500 : 2009 ハラール食品基準

MS1500 : 2009について、範囲と定義、ハラール食品基準の要件、OICとCodex基準

10. MS 2200 : 2008 ハラール化粧品について

ハラール化粧品の基準、基準の必要性、MS2200-イスラームの消費財 Part1-化粧品、パーソナルケアの一般指針、ハラール化粧品とパーソナルケア用品のソースについて

11. MS 2424 : 2012 ハラール薬品について

ハラール薬品基準

12. MS 2610 : 2015 ムスリムフレンドリーホスピタリティ

MS2610 : 2015について、断食・ラマダーン月・イフタル (断食明け)・キブラ (礼拝方角) 等の定義、管理責任について、ホテル、ツアーパッケージ、ツアーリストガイドに必要なこと



講義風景

13. MS 2400 : 2010 ハラール物流

MS 2400 : 2010 ハラール物流、輸送・倉庫・小売、ハラールサプライチェーンの流通について、ハラール・タイエバン保証パイプラインの要素、代表的製品管理プロセスフロー
MS 2400 : 2010 ハラール物流基準の定義と必要事項、リスクマネジメント、管理責任、ハラール・タイエバンリーダー、委員会

7月27日

14. ハラール認証のマニュアル手順について

マレーシアハラール認証の手引き

15. ハラール認証システム

ハラール産業 (製品、サービス、マーケット、ステークホルダー) について、ハラール認証システム (何を、何故、どうやって、いつ、誰が行なうか)、ハラール基準・ガイドライン、有能な人材とは (健康で、専門的知識を持ち正直でチームワークがあるなど)、運営と管理

16. ハラール認証実施について

食べ物の危険な要因 (ハラームな食べ物、飲み物でない。菌や身体的、科学的に危険な要素を含まない)、ハラール認証の過程、ハラール認証における関係書類 (企業プロフィール、企業登録、製品情報、原料供給者情報など)、査察について (必要書類、必要項目)

17. ハラール責任者・社内ハラール委員会について

ハラール責任者の定義・資格、社内ハラール委員会について (構成、ルールと機能)、社内ハラール査察

18. ハラール食品産業の確実性

製品に用いられる豚、ハラール認証における問題、優秀なハラール分析センター (Centre of Excellence For Halal Analysis)、UMS = ハラールサイエンスラボ、権威・消費者・生産者三者のハラールの骨組み、ハラール分析について、科学的アプローチからのハラール・タイエバン (分析RT-PCR、GCHS)

19. ハラール産業の中のGMO (遺伝子組み換え生物) の問題

GMOについて、GMOの便益、GMOとハラールとの問題

7月28日

20. ハラールHACCPシステム

GMP (Good Manufacturing Practice) とは何か、GHP (Good Handling Practice) とHACCP (Hazard Analysis Critical Control Point)、HACCP7つの重要事項、HACCP原則を用いる上で必要な仕事

21. 食品添加物とE-CODE

食品添加物の定義、食品添加物を用いる目的、食品添加物の分類、E-Codeのグループ、疑義ある食品添加物、ハラールな添加物であることの重要点

22. ハラール食品の研究開発

ハラールのR & D (Research & Development)、ハラール科学について、ハラール製品のイノベーション (カプセル、コラーゲンなど)

23. ISO 19011 査察管理システム

24. ISO 22000 (PRP)

25. 査察の方法論とHMS

テスト実施

7月29日

26. HCBの運用

27. 査察を行うための書類

28. 机上査察、社内査察について

29. 査察の方法論とHMS実践の評価 (食肉加工工場訪問)



DESA鶏加工工場

DESAHPより加工風景

7月29日

査察研修：

実際の査察に同行させていただいた。査察先は、Sabah州にある

DESA。DESAはサバ州の主要な鶏肉加工会社のひとつで、家畜場や酪農場、食肉加工工場、小売りビジネスなど多様な事業を行っている。

顧客としては主要なホテルやケンタッキー・フライドチキン、マクドナルド、ケニー・ロジャースなど多数の飲食店、スーパーマーケットである。ローカルのため日本に輸出は行っていない。

自社で繁殖農場を持ち、そこで採れる卵から自社製造した餌で飼育した鶏を、自社工場で食肉加工している。

査察は鶏の食肉加工工場で行われた。まず加工場の査察前に、事務所にてどのように製品を製造しているか、衛生管理や製造工程の確認も合わせた企業PRの映像を観る。その後その時点での不明点を確認した後、タイエバンに関わる衛生面でのハラール性を維持するため、頭から帽子、マスク、耳栓、作業着、足には長靴まで全身着替える。

ここで加工場に移動し、実際の加工現場の確認となる。加工工場は、厳格に温度管理がされた各部屋を鶏が天井についたレーンにつるされながら移動し各加工工程を行っている。鶏の屠畜から、解体加工、解体加工は多くの作業員が手元に運ばれてきた鶏を手際よく解体、そしてパッキングをおこない梱包する。梱包したものはすぐに冷凍庫へ移動される。包材などの保管場所は乾燥物と非乾燥物で分けられていた。各工程がとてもシステムチックに行われていた。

査察官は一つ一つの加工手順のハラール性を、担当者にいくつか質問しながら確認していた。工場査察後に、ハラール性に問題がないことを確認し、査察が完了した。査察を行う際は、目で見て、耳で聞いて、ハラールかハラームである証拠を見つけることが大事であると、査察官から教えられた。査察後、工場敷地内に製品の販売所があるとのこと赴いた。日本に比べてとても安価で牛乳や山羊乳、鶏肉が販売されていた。

サバ州概要：

サバ州は、マレーシアの13ある行政区画（州）のひとつであり、インドネシア共和国、ブルネイ・ダルサラーム国も併存するボルネオ島北部に位置する。人口は約350万人で、カザン族、バジャウ族などの先住民族、中華系やフィリピン系をはじめとした、32もの民族が暮らしている。

気候は高地を除けば熱帯雨林気候であり、昼間は特有の暑く蒸した空気に覆われていた。

しかし16時から17時頃に短時間必ず降る大雨（スコール）によって、幾分過ごし易い気温になっていた。

このサバ州の首都コタキナバルに今回のトレーニングが開催されたサバ大学がある。コタキナバルはボルネオ島のマレーシア領地域で最大の都市であり、約47万の人が暮らしている。高級リゾートホテルやショッピングモールが並びリゾート地であり、市街地から車にて1時間程で、コタキナバルの名の由来となるキナバル山のある、キナバル自然公園へ行くこともできる。

街中を車で移動中、幾つもの建設中の建物が見られた。リゾート地として、さらに発展していくものと思われる。

宿泊したホテルに隣接するショッピングモール（1ボルネオハイパーモール）内のスーパーマーケットには、食料品をはじめさまざまな物が売られていたが、ハラール品と非ハラール品の売り場がきちんと分けられ、商品販売時のハラール性が維持されていることを確認することができた。

また飲食店は、マレーシア料理や中華料理はもちろんのこと、日本料理（寿司店）やケンタッキーフライドチキン、マクドナルドなど様々なお店が賑わいを見せていた。ハラールな店は、店頭にはJAKIMが発行したハラールマークがみられた。



飲食店に掲示されているハラールマーク

当研修を受講し、ハラール証明書を取得するためには、ハラールであることはもとより、タイエバン（良い/健康、環境など）であることがより重要視されていると感じた。食品を製造する上で温度管理を徹底することや、工場内を清潔に保つことで菌の繁殖を防ぐなど、日本でも行っている衛生面の管理が、ハラール認証の取得にも欠かせないものとなっていた。

また、マレーシアではハラールであることを偽りラベルに記載することや、虚偽の申告をした場合に、罰金や刑が明確に法律で定められていることから分かるように、製品について誤って非ハラール製品をハラールとしてしまわないよう、慎重にハラール性の確認を行っていかなければならないことを実感した。



サバ大学院モスク

また、マレーシアのハラール認証が科学的且つ、システムチックに行われていること、また各専門機関が連携し、製品やサービスのハラール性を確認、担保していることを学んだ。

最後に、帰路のクアラルンプールでの乗り継ぎにて時間があったため、クアラルンプールセントラル（KLCC）の伊勢丹並びにペトロナスツインタワーを見学した。

マレーシアの首都であるクアラルンプールは人口700万を超えるアジア有数の都市である。高速道路やモノレール、市内鉄道や空港から中心部まで止まらずに行けるエクスプレスなど、インフラ開発が進んでいる。クアラルンプールの中心地KLCC地区には伊勢丹や紀伊国屋、そごうなど日本発の店も多く進出している。伊勢丹は日本の伊勢丹となら遜色なく、多くのブランドや飲食店がひしめき合っていた。訪れている人々の数や熱気に、クアラルンプールのパワーを感じることができた。

クアラルンプールのペトロナスツインタワーは、1998年に完成した高さ452メートルの超高層建造物であり、国立石油会社ペトロナスによって建築され、多くの企業がオフィスビルとして使用している。



クアラルンプールの伊勢丹、ペトロナスツインタワー

イスラームから見た日本そして地球 ～イスラーム世界の混乱と日本の役割～

イスラーム研究所長 森 伸 生

筆者は2016年9月17日(土)に海外事情研究所主催の「国際講座」にて講演を行いました。その内容をまとめましたので、ここに発表いたします。「国際講座」での講演では副題を付けませんでしたが、ここでは内容を明確にするために上記のような副題を付けました。

はじめに

イスラームでは地球をどう見ているのかについて、自然学的、宗教的にクルアーンから見ていきます。

宇宙創造について、クルアーンには次のように記されています。「あなたがたは(かれが)うち立てた天(の創造)が、あなたがたを創ることよりも難しいと思うのか。かれはそれを高くかけ、それから整え、夜を暗くし、そして、明かりを現した。そして、大地をそのあとに彼は延べ広げた。」(79章27～30節)この一節のなかで、「大地をそのあとに彼は延べ広げた。」とありますが、「延べ広げた」の原語はアラビア語でダハーです。私が学んだマッカのウナムルクラー大学でクルアーン解釈の授業の時に、この一節の解釈がありました。ダハーの意味には別の解釈があり、卵形の球にするという意味があるとのことでした。つまり、アッラーは大地を球形に創造した、それも少しいびつな形の球であるとのことでした。ダハーの意味にその解釈があることの証拠として、現在でもチュニジアでは卵のことをダヒーと表現しているとのことでした。これについては後にチュニジアの人に確認をしまして、その通りとのことでした。そこで、私はそのクルアーン解釈を行った教授に対して即座に質問しました。「七世紀の預言者は大地が丸いということを知っていたのですか」と。教授は「そうだ」と一言。「では預言者の周りの人々も預言者からそのことを聞いて知っていたのですか」とさらに尋ねました。「その通りである。しかし、そのことがどのような意味があるというのかね。当時はその知識を証明する方法がなかった。つまり、クルアーンに書かれてある様々な科学的知識は後世の人々によって徐々に証明されることになる。それは後世の人々にとっての課題ということである。わかったかね。」との教授の言葉でした。このようにマッカでクルアーン解釈の在り方を学びました。

クルアーンの中には、大地が創造され、そこには人間が生きていくための生活の糧についても記しています。「かれは、大地をあなたがたの臥床とされ、あなたがたのため、そこに道を縦横につけ、また天から雨を降らせられる。それによって、われはそれぞれの異なった雌雄の植物を生長させる。食べ、またあなたがたの家畜を放牧しなさい。本当にその中には、理知ある者への種々の印がある。」(20章53～54節)アッラーは人間のために大地に様々な生活の糧を与えていますが、その大地を守る責任をも人間に命じています。「本当にわれは、地上に代理者を置くであろう。」(2章30節)同様のことが預言者の言葉にも伝えられています。「この世は美しく青々としている。そして実に至高なる神こそは、あなたをそこにおける代理人とされ、そこであなたがいかにも振舞うかをご覧になられているのである。」(サヒーフ・ムスリム3巻P.629)イスラームでは、このようにアッラーはすべての人間が生きていくことが出来るすべを人間に与えていると考えます。そこで、イスラームの教えはどのように世界に、そして、日本に広がっているのかを見ることにします。さらに、イスラーム信徒たちはどのようにイスラームの教えを体現しようとしているのかを見ていきます。それによって、イスラームから見た日本での現状、地球規模としての世界の現状を見る

ことができると考えます。そして、イスラームから見て日本が現在の国際社会の中で何ができるのかを考えてみたいと思います。

1. イスラーム世界

世界のイスラーム信徒人口は20億3804万人とあり、世界人口71億5151万人のうち28.26%(2014年)(<http://www.muslimpopulation.com/World/>)との統計が報告されています。この数字はイスラーム信徒側から見た数字ですので、少し引いた数字が妥当だろうと考えます。国や地域で見ると、イスラームの国際組織であるイスラーム諸国協力会議機構(OIC)には57カ国が加盟しています。現在もなお、イスラーム信徒人口は増加しており、米調査機関ピュー・リサーチ・センターの調査(2015年4月)によると、2010年でキリスト教徒人口は約21億7千万人、イスラーム信徒人口は約16億人(それぞれ世界人口の31.4%と23.2%)であったが、2050年ではキリスト教徒人口29億2千万人(31.4%)、イスラーム信徒人口は27億6千万人(29.7%)になるとの予測をたてています。

イスラーム信徒の増加理由として、ジャーナリスの浅川芳裕氏が詳細な分析をしています。(*「なぜ増える?イスラム教への改宗」* 浅川芳裕 文藝春秋SPECIAL 2016冬)イスラーム信徒の拡大の要因として三つあげています。(1)イスラーム信徒の出生率の高さ、(2)若者人口の多さ、(3)改宗者の増加です。同様にピュー・リサーチ・センターの調査報告を用いて、2050年までに1億600万人がキリスト教徒をやめ、改宗先として最も多くの割合を占めるのは、イスラームだと予測されていることをあげています。さらに、イギリスの場合では、英スウォンジー大学調査(2011年)報告では、改宗者数はここ10年で10万人を突破し、改宗者の三分の二が女性でその七割が白人、平均改宗年齢は27歳となっているとあげています。そこでは、改宗の理由として、「イギリス社会に蔓延する消費主義と不道徳にうんざりしたこと」、「消費主義と不道徳」の具体例としては、「アルコールと酔っぱらい文化」「性的な許容性の高さ」などが筆頭にあげられています。男性の改宗者の場合では、生活の規範、人生の目的が魅力とされています。またイスラームの教義の明快さ、十字架やキリスト像、マリア像のないモスク内のシンプルさがあげられています。さらに、湾岸戦争時、サウジアラビアに滞在した兵士のうち、3000人が改宗した事実や、現代的科学との整合性を見出す科学者、教義にある人種の偏見のなさ魅了されたアメリカ黒人の例などが挙げられていました。このように様々な報告を見ていきますと、地球規模でイスラームが拡大していることが、それもイスラームの教義やその良さに惹かれて改宗していることなどが理解されます。では地球規模でイスラームが広がっている中で、日本においてはどうか。

2. 日本のイスラーム状況

日本のイスラーム信徒人口は8万～12万人であり、日本人イスラーム信徒数は1万人～1万5千人と見られています。マスジド(モスク:礼拝所)数は現在、59か所。1970年頃の日本にはマスジドは東京と神戸の二か所にしかありませんでしたので、それを考えると、イスラーム信徒数は徐々に増えているといえます。しかし、人口比率から見ると、0.1%にもなりませんので、イスラームが広がっているとは言い難い状況です。

では、なぜ日本ではイスラーム信徒は増えないのでしょうか、それは同じ一神教のキリスト教の場合も同様です。つまり、日本で一神教が拡大するのが非常に難しいと言わざるを得ません。日本古来の宗教と言えば神道があります。外来宗教として日本で定着してい

るのは仏教となります。仏教が普及していった理由は神道を取り込んだところにあると考えられます。その一つの例として、仏教の法事の年数などが、神道において死者の魂が山を登り浄化され、神になっていく過程の年数に合わせていると見られていることが言われています。

キリスト教が日本に伝来した戦国時代には、キリシタン大名などが出て、一時的に普及したことがあります。権力者の入信によって入信者が増大するなどの影響によるところが大きいと考えられます。イスラームがインドネシアに広まったときにも、当初は村の長がイスラーム信徒になることによって村全体がイスラーム化していったことが伝えられています。しかし、日本でのキリスト教の普及に関して見れば、伝来から400年以上がたった現在のキリスト教徒人口は約104万人、日本の人口の0.82%にすぎません。それは個人としての信仰は浸透しても、家族そして社会としての信仰への発展がなかったといえるでしょう。このことは、イスラームの普及にも同じことが言えると思います。

日本のようなイスラーム信徒の少ない社会では、イスラーム信徒の生活はそれなりに難しいものがあり、さまざまな工夫が必要となってきます。イスラーム法学の中の、マイノリティー・イスラーム法学では、社会のマイノリティとして生きる信徒への規範が考えられています。その実例として、ハラールの肉が手に入らない場合には、キリスト教徒の賭畜した肉（牛、羊など）なら食することができますので、日本では和牛よりもオーストラリアからの輸入牛肉などが良いと考えることができるのです。その輸入牛肉はキリスト教徒による賭畜の可能性が高く、和牛は仏教徒による賭畜の可能性が高いからです。このようにイスラーム信徒が日本で生活するためには様々な知恵を働かせて生きていくことになります。一方でイスラーム信徒が多勢となっているイスラーム諸国での生活はどうでしょうか。イスラーム法つまりシャリーアを求めて生活しているのでしょうか。

3. ムスリム・マジョリティー社会のイスラーム法的実情

先にイスラーム諸国協力機構に加盟している国は57カ国あると言いましたが、そこではイスラーム法はどのように実行されている

のかを見ることにします。それについて、「イスラーム教徒のシャリーア（イスラーム法）適用の考え方」として統計が出ています。（<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/9036.html>）

その統計の内容を説明しますと次のようになっています。

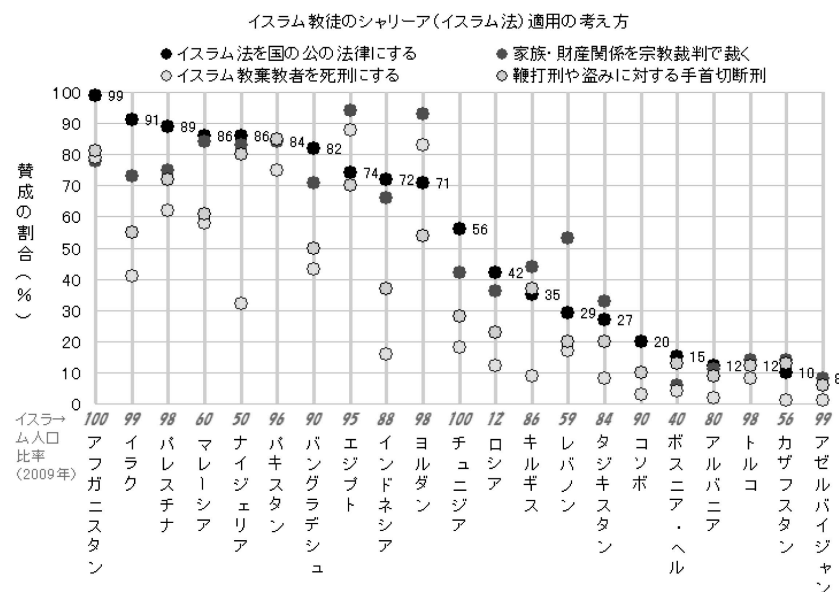
- (1) イスラームを国の公の法律にすることに賛成しているイスラーム信徒は、アフガニスタンでは99%、イラクでは91%、パレスチナでは89%、マレーシア、ナイジェリアでは86%とほとんどが多数を占めているのに対して、アルバニア、トルコでは12%、カザフスタンでは10%、アゼルバイジャンでは8%と少数派となっている。

他のイスラーム適用の項目への賛成の割合も国別にほぼ同様の傾向にあるが、項目によっては国別の考え方が必ずしも同一ではない。

- (2) 家族や財産のトラブルを宗教法で裁くべきかどうかでは、エジプトやヨルダンでは90%が賛成しているがイラクやパレスチナでは8割以下となっている。
- (3) 刑罰に関しては、イスラーム法の刑罰の適用に関しては、以上2項目より、厳格適用はひかえるべきだとする意見も多いようである。特にイスラームを棄てた者に対する死刑については、賛成する者が、他の3項目と比較して少なくなっている。それでもエジプトやヨルダンでは8割以上が賛成しており、厳格適用の考え方が強い国もあることがうかがわれる。

統計から理解されることは、イスラーム諸国といえども、決してシャリーア施行を望んでいないという現実があるということです。そこに、現在のイスラーム諸国の問題点が出てきています。統計の中では、一部では、99%の民衆がシャリーア施行を望んでいるとの統計もあります。そこでは、彼らが望んでいるシャリーアとはまさに民衆の生命、財産、名誉が確実に守ることができるシャリーアを期待しているのです。また、全く、望んでいないとの統計については、シャリーアを統治者が都合のよいように利用しているとみていると考えられます。いずれにしろ、シャリーアの正しく実施されている状況とは程遠いと言わざるを得ません。

イスラーム世論の国別温度差(2011年)



(注) 2011年調査(一部2012年初)。サンプリングは全国を対象だが回答はイスラーム教徒のみ(一部の国ではイスラーム教徒集住地域を調査)。国の並びは「イスラーム法を国の公的な法律にする」に賛成の割合(●)の順。ロシアの同設問は「国の」ではなく「ムスリム共和国の」。イスラーム人口比率はPew Research Centerの別調査による。

(資料) Pew Research Center, "The World's Muslims: Religion, Politics and Society", 2013年4月

4. ムスリム・マジョリティー社会とイスラーム主義の出現

イスラーム諸国はムスリム・マジョリティー社会ですが、シャリーア施行に関しては疑わしい状況です。イスラーム社会の在り方を考えた場合、ムスリム（イスラーム信徒）が理想とする社会とは何かと、ムスリムに尋ねたならば、預言者時代の社会、共同体であるとの回答が返ってきます。では、預言者時代には殺人とか窃盗とか姦通とかはなかったのかといえ、そのようなことはなく、ほとんどの犯罪が起っていたはずで、人間社会ですから当然です。しかし、それにもかかわらず、理想の社会であると回答するのは、預言者ムハンマドがいたからです。つまり、公正に裁く人物が存在したからです。理想の社会とは民衆の権利を守るべく公正に裁くことができる統治者がいるかどうかであるということになります。現在社会においてもシャリーアは存在するが、それを施行して公正な判断を下すことができる統治者は存在しないことになります。

イスラームの歴史はウマイヤ朝、アッバース朝、ファーティマ朝、オスマン朝と続きますが、その1400年近くのイスラーム史の中で、常にクルアーンの教えの実現にむけての行動が起っていました。つまり、シャリーアが尊重されることが社会の基本原則であるとしての社会認識が存在していました。

しかし、その社会認識が近現代になって、完全に崩れてしまいました。19世紀から20世紀初期にかけて、イスラーム諸国の崩壊と植民地化によって、イスラーム社会にてイスラーム法が実施されなくなり、イスラーム共同体にとって前例のない危機が訪れました。

そこで、民衆の中から二通りの反応が現れました。イスラーム社会が弱くなり、植民地化されたのは、イスラームそのものが役に立たなくなったからであると考え、社会の世俗化を求め、イスラームやイスラーム法は礼拝や断食など信仰行為だけを律するだけに、政治などについては西洋法を導入することを求める考えを持つようになりました。つまり、世俗化の道を開くことになりました。その最たるものが新生トルコ共和国です。しかし、一方では、イスラーム諸国が弱体化したのは、ムスリムたちがイスラームを十分に理解していなかったからであるか、それとも、理解していたがそれを正しく実行しなかったからであると考えました。それがイスラーム主義の考えへと発展していきました。イスラーム主義とはシャリーアが正しく施行される社会を目指す運動のことを指します。イスラーム主義の運動は最初のころは地味な民衆運動でした。ハサン・アルバンナー（1949年没）という人物がエジプトで行ったカフェ説法から始った運動はやがてムスリム同胞団と呼ばれる団体になりました。

5. イスラーム主義過激派の発生と攻撃対象の変遷

ムスリム同胞団の方法は個人のイスラーム覚醒を促し、家族のイスラーム覚醒、そして社会のイスラーム覚醒と段階を踏んで、最終的に国家のイスラーム覚醒を実現するといった、非常に時間を要する方法となっています。このイスラーム主義運動は地道な活動として、人々の間に広がっていきましたが、こうした漸進的な変化に耐えられない者たちが出てきて、すぐにでも結果を出そうとしました。かれらが採った行動は政府を破壊して、自分たちの考える社会を築こうとするものでした。それがいわゆるイスラーム過激派と呼ばれる者たちです。ムスリム同胞団から分派して活動した組織にジハード団やイスラーム集団と呼ばれる組織があります。彼らの思想はクトブ主義と呼ばれるものでした。クトブ主義とはサイイド・クトブ（1966年没）が主張した二項目対立思考です。サイイド・クトブは当時のナセル政権にとって危険人物とされ、逮捕され収監されますが、牢獄の中から彼は主張を続けます。その内容は「私は正しいイスラームを主張しているが、その私を弾圧する政府は何者なのか。それは明らかに、ジャーヒリーヤ（イスラームが現れる以前

の無明時代）である。」として、当時の政府をイスラームではないと宣言しました。これがタクフィール（不信者確定）思想と呼ばれるもので、政府が過激派の攻撃対象となる論理となりました。さらにその論理は発展します。たとえ、統治者がムスリムであっても、シャリーアを施行していない統治者はムスリムではないとして、背教者とみなし、攻撃の対象としました。この過激派の理論は革命のジハード論と呼ばれるようになり、ムスリム国家といえども、攻撃の対象となりました。この過激派発生のメカニズムを見てみると、まず個人的なイスラーム覚醒、次いで理想的なイスラーム社会の体現願望です。しかし、現実への失望によって先鋭化することになり、過激の方法をとるようになります。ところが、後述述べますが、現在の過激派の行動要因はより複雑化しています。

攻撃の対象をみてみると、古典的なジハード論で攻撃を行っている状況もあります。それはイスラーム領土への侵略者に対する攻撃です。その例として挙げられるのは、パレスチナを侵略、占領したイスラエルを攻撃の対象とするパレスチナのハマス組織です。さらに、1979年のソ連軍のアフガニスタン侵攻に対してイスラーム諸国から集まったアフガン義勇兵があります。特殊な形では、湾岸戦争後において、サウジアラビアに駐留した米軍に対する攻撃で、これはウサーマ・ビン・ラーディン（2011年没）やその仲間、帰還アフガン義勇兵たちです。彼らは駐留米軍のことを「現代の十字軍」と呼んでいました。つまり、その呼び名はアラブにとって侵略者の象徴です。サウジ政府が認めた駐留米軍に対する攻撃によって、サウジ国内での居場所を失ったウサーマたちは国外へと逃れ、アラブ諸国からのほかの離脱者たちも集結して過激派集団「アルカーイダ」を形成し、彼らはアラブ・イスラーム世界に存在するアメリカ関係の施設を攻撃対象としました。そして、最終的に2001年9月11日にアメリカで同時多発テロ事件を起こしたのです。それは、イスラーム世界がアメリカから武力的に経済的に常に侵略されている状況であり、その反撃を行ったとの考え方でしたが、言うなれば防衛ジハードの拡大解釈論です。

この9・11同時多発テロ事件によって、「イスラーム嫌い」が国際化しました。その顕著な事件は預言者ムハンマドの風刺画問題です。2005年9月にデンマークの日刊紙にその風刺画が掲載されました。それに対して、イスラーム社会からは反対デモが起きましたが、まだその反対行動は社会的に許容できるものでした。

しかし、一方で、アメリカは対テロ戦争を主導して、イスラーム世界への攻撃を開始しました。このアメリカの提唱するテロとの戦いによってイスラーム世界は大きな打撃を受けることになります。そして、それは暴力の連鎖と武力による解決、さらに武力の誇示、つまり破壊の大きさが目立つようになりました。対テロ戦争でまずアフガニスタン侵攻が起り、タリバーン政権（2001年10月）が打倒されました。次いで、イラク戦争が2003年3月に起り、サダム・フセイン政権が崩壊しました。イラクの崩壊によって、アルカーイダなどの過激派諸派が活動を活発化させることになりました。さらに、過激派諸派の間で勢力争いがおこり、力の誇示が始まった結果、その攻撃は残虐さを増長させることになりました。ここで、完全に今までのイスラーム主義者による攻撃対象がアメリカなどの政府施設から無差別な一般市民への攻撃と変わり、暴力の連鎖が始まりました。

アラブ諸国では、人々が暴力の連鎖に苦しむ中で、一縷の望みといえるアラブの春と呼ばれる民主化運動が2010年に始まりました。それはチュニジアから始まり、エジプト、リビアで政変を起こすに至りましたが、結果としてエジプトでは民主的に選挙によって成立したムルシー政権がクーデターで倒され、スーシー軍事政権が成立しました。リビアでは国内の権力闘争が起り、シリアでは内戦となり、混乱状態が続いています。

このような混乱状態に乗じて出てきたのがイスラーム国（IS）という過激派集団です（2014年）。彼らは独善的なカリフ国家正義論を掲げ、カリフ国家への忠誠者以外は攻撃対象としました。ISの出現によって攻撃対象や行動要因が多様化していきます。ISの構成員は今までの過激派集団とは異なり、シリア国内や他のアラブ諸国からイスラーム主義者、金銭的現実主義者、政治的弱者、社会的弱者が集まってきました。単にイスラーム社会を構築することを目的とする今までのイスラーム主義者から自分たちの社会に不満を持つ者まで、様々な目的をもった者が集まっていました。非常に複雑な構成員状況といえます。非アラブ諸国からは差別格差社会に対する反発者、「イスラーム嫌い」に反発する者、新たな生きがいを求める者たちが集まっていました。

ISの攻撃対象は周辺のムスリム諸国に加えて、ISに攻撃してくる欧米諸国へも広がりました。つまり、攻撃対象は既存のムスリム社会と侵略者という構図としています。

アメリカ主導の有志連合による攻撃が激化することで、ISの支配地域が縮小していく過程で、ISの参加者が母国に帰国して破壊活動を起こしたり、地元の人間からもISの主張に共鳴してテロを起こしたりする者が出てくることになります。

世界各国で頻発するISに関連するテロ事件は攻撃対象が一般民衆にも及び、イスラーム主義の名を借りた憎悪犯罪化してきました。

最近起こったテロ事件をあげてみますと、2015年1月7日～9日に起こったフランス・パリの風刺週刊紙「シャルリー・エブド」本社襲撃事件、2015年11月13日にパリのバタ克蘭劇場や喫茶店などで起こった同時テロ事件（130人死亡）、2016年6月13日にISテロリストによるパリ近郊マニャンビルで警察官夫妻殺害、2016年7月14日にチュニジア人男性による革命記念日ニースの市中心部の遊歩道付近群衆に突っ込んだ車暴走事件（犠牲者84人）、2016年6月12日のアメリカ・フロリダ銃乱射事件、2016年7月1日（ラマダーン月26日金曜日）でのバングラデシュ・ダッカの高級レストラン襲撃事件などがあります。

これらの事件を見てみますと、社会的不満者が過激派の手法を利用して起こしたか、または利用されて起こしているかと考えられます。それぞれの事件でISが声明を発表していますが、その信ぴょう性には疑問があり、ISからの指令で事件を起こしているとは限りません。それよりも、ホームグロウンによる独自の行動として見ることができます。確かに、一部ではシリアにおけるIS領域の弱体化によって離散した帰還IS戦闘員による行動もあります。さらにISの宣伝、勧誘者の影響もあります。IS思想（独善的カリフ国家論：他を否定する思想）の世界規模的展開の兆候とも受け取られます。しかし、それだけではなく、テロ実行者の社会的状況が多様化している現状があります。

フランスの事件ではテロ実行者は移民二世であり、フランスでは社会的脱落者と見られ、二級市民的扱いを受けるなど、社会的な不条理に対する反発の手段としてISの方法を利用した結果と考えられます。それは自己超越の方法としてジハード思想としての英雄論を受け入れたことが考えられます。アメリカの事件も移民二世が起こした事件ですが、彼は精神的病状であったといわれています。ダッカの事件では地元出身で裕福な家庭環境にあった若者たちですが、彼らが個人的限界を感じていたとも見られています。そして、国内の政権抗争による社会的な不条理に対する反発の方法としてISの方法を利用した結果と考えられます。やはり、自己超越の方法としてジハード思想としての英雄論に入りこんだのではないかと考えられます。ダッカ事件では日本人が犠牲となり、日本人は過激派の標的なのかとの疑問が提示されましたが、すでにアメリカがイラクを攻撃した時から、日本はアメリカ側に立っていますので、過激派からの攻撃の対象となっていました。つまり、日本人の立場は欧米諸国の側で

あり、国際的に富裕層の側といえます。それを認識して、国際的な活動に従事する必要があります。

このようなテロ実行者の状況を考えていきますと、イスラーム過激派というふうにはイスラームを冠しますが、行動の原因を考えると、地元の社会に不満を持つ者がイスラームを利用する、または利用される状態であることが確認できるのではないだろうかと考えます。テロ実行者の実態を直視することによって、テロの原因が何であるのかが見えてきます。イスラーム過激派という言葉ですべてを片付けるのではなく、その現実を見る必要があると考えます。

さいごに

イスラームから日本そして地球を見たならば、アッラーが人間に与えた使命を呼び起こすことが求められています。それは人間が地球に神の代理人として創造されたということであり、人間には地球を守る使命があるということです。

預言者の言葉があります。

「信者たちは一人の人間のようなものである。彼の頭が痛みを訴えれば、その他の体の部分が高熱や不眠を喚起する。」

「ムスリム達は一個の人体のようなものである。もし彼の目が不調を訴えれば、体のすべてが不調を訴える。また彼の頭が不調を訴えれば、彼の体の全てが不調を訴える。」

社会的には、この預言者の言葉の体現が求められています。つまり、人間の体はたとえとげが刺さっただけでも、その痛みをとろうとするものです。同じように、社会においても不当に苦しむ者たちがいれば、その者たちの苦しみを取り除くように社会は動かなければならないとの教訓です。

とくに、これはイスラーム世界に求められていることは言わずもがなであります。

イスラーム世界から、過激派はイスラームではないとの宣言が出ていますが、宣言を出すだけでは、単に責任逃れだけにすぎません。イスラームの良さが体現されたイスラーム社会が出来上がらないがゆえに、過激派が出てくることを認識しなければなりません。イスラームの良さを体現した社会の構築に取り組まなければならない現状があります。

そして、非イスラーム社会では、「イスラーム嫌い」をやめにしてみてはいかがであらうかと言いたいです。「イスラーム嫌い」は過激派の行動を正当化するのに用いられています。

そして、日本はさまざまな文化から良いところを学ぶ能力を持っています。イスラームからもその良さを学び取り入れることをそろそろ考えてみてはいかがでしょうか。

現在、イスラームから日本、そして地球規模で求められていることは「違い」を探ることではなく、共通点を探ることです。共通点とは、まさにそれぞれのものが持っている良さのことです。ゆえに、クルアーンではアッラーが人類に向かって次のように言っています。

「人々よ、われは一人の男と女のからあなたがたを創り、種族と部族に分けた。これはあなたがたを、互いに知り合うようにさせるためである」（49章13節）

違って当然であり、違いの中から共通点を見つける、つまり、お互いに良さを見つけることによって、お互いを知り合うことができると教えています。

日本はまさに違いの中から良さを見出し、日本の文化に取り入れてきました。その日本の特技を世界に向けて発信してはいかがでしょうか。イスラームの中から共通性を見つけることを日本から発信してはいかがでしょうか。

正統四代カリフの時代－アブーバクル（29）

（前回からの続き）

偉大なるアッラーはアッラーの使徒様が生きておられる時に、すでに使徒様には彼の死を伝えておられた。

アッラーが言われていることに、「ムハンマドは、一人の使徒にすぎない。彼以前にも多くの使徒達が過ぎ去っていった。もし彼が死ぬか、または殺されたら、あなたがたは踵をかえすのか。誰か踵を返そうとも、少しもアッラーを損なうことは出来ない。だが、アッラーは、感謝する者には報われる。」（3章144節）

これを聞いたウマルは驚きの声を挙げた。「このような一節がクルアーンの中に？本当に、このような一節が以前に下りていたとは。」

ウマルはあまりの衝撃で立っていることができなく、地に伏してしまった。そして、預言者が逝去されたことを認めたのであった。アブーバクルはなおも続けて、「アッラーは言われた。『本当にあなたは（いつかは）死ぬ。かれらもまた死ぬのである。』（39章30節）『かれの御顔の外凡てのものは消滅する。裁決はかれに属し、あなたがたは凡てかれの御許に帰されるのである。』（28章88節）『地上にある万物は消滅する。だが永遠に変わらぬものは、尊厳と栄誉に満ちたあなたの主の慈顔である。』（55章26、27節）

アッラーはアッラーの宗教を確立するまでムハンマド様を生きたがらえさせたのである。アッラーの命令を明らかにするまで、アッラーの報せを伝えるまで、アッラーの道に戦うまで、ムハンマド様を存命させたのである。そなた達には正しき導きを残されたのである。アッラーは真理を明らかにした後に、ムハンマド様を逝去させたのである。アッラーを我が主とする者にとっては、アッラーは生きておられ死ぬことはない。ムハンマド様を崇拜し、神とみなす者にとっては彼の神は滅び去ることになる。アッラーを畏れよ。己れの宗教をしっかりと握みなされ。己れの主に頼りなされ。アッラーの宗教こそが正道である。アッラーの言葉こそが完全無欠である。アッラーこそが助けを求める者に援助するお方である。アッラーの書はそなた達の手元にある。アッラーの書は光りであり、救いである。アッラーはこの書でムハンマド様を導かれた。その書には許されたものと禁じられたものが記されている。アッラーに誓って、我々の剣は未だ抜かれたままで、鞘に収められておらず、我々に対抗する者と戦うためである。我々がアッラーの使徒様と一緒に戦ったように。」

教友達はアブーバクルの言葉に動揺していた心を落ち着かせ、預言者の死は動かしがたい事実であると受け入れ、苦悶に絶えながらも預言者に最後の別れを告げたのであった。

預言者の死はアブーバクルをも含めてすべての教友にとって最大の試練であった。教友達は、アッラーの宗教が他のすべての宗教を

完全に打ち負かすまで、預言者は彼らと共にいるものと考えていた。彼らが常にそらんじていた一節がある。

「アッラーこそは、導きと真実の教えをもって、それをすべての宗教の教えのうえに置くために、彼の使徒を遣わされたお方。本当にアッラーは立証者として万全であられるお方。」（48章28節）「アッラーこそは、導きと真理の教えをもって使徒を遣わし、たとえ多神教徒達が忌み嫌おうとも、すべての宗教のうえにそれを表されるお方である。」（9章38節）

預言者はアラビア半島で確かにイスラームをすべての宗教の上に確立せしめた。しかし、まだ半島以外の各地方ですべての宗教の上にはイスラームを確立せしめてはいなかった。そして、半島でも、イエメンでは偽預言者アスワド・アンサーとともにイスラームの誓約を反古にする者が現われ、ヤマーマ地方ではハニーファ族が偽預言者ムサイリマとともにイスラームの誓約を反古にした。それも、こともあろうに、預言者の存命中であった。ならば、信仰篤き者でさえ、真理の宗教をすべての宗教の上に現すということは未だ達成されてはいないと考え、それ故、預言者はこの世を去るわけではないと思ひ込むのも無理からぬ事であった。そして、マディーナの人々が極度の混乱状態になったのも、決して驚くことではなかった。

（次号に続く）

研究会報告

【平成28年度第2、3回タフスィール公開研究会開催】

今年度第2回目のタフスィール（クルアーン解釈）公開研究会が、7月23日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。講師は四戸純弥同志社大学教授でクルアーン第17章夜の旅章22～52節を解説した。第3回目のタフスィール公開研究会は、9月24日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。講師は野村明史拓殖大学海外事情研究所助手でクルアーン第17章夜の旅章53～77節を解説した。

محتويات العدد

1. تقرير عن تدريب فاحص الحلال بولاية سبا في ماليزيا
موظف لمعهد دراسات الشريعة : ياماشيتا ياسوهيرو
2. مقالة عن لليابان والأرض من رأي الإسلام
مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
3. مقال : الخلفاء الراشدين (29)
مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
4. أخبار المعهد: الدور الثاني و الثالث لدراسات التفسير (سورة الإسراء)